

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

はじめに

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-01-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡辺, 裕, Watanabe, Hiroshi メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1421

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



はじめに

渡辺 裕

本冊子は、2020 年度本学大学院博士後期課程の開設科目「博士共同研究 A」の報告書である。ともすると専攻する実技ごとに細分化されたタコツボ的なものになりがちな音楽大学の教育に風穴をあけ、学生たちがそのような専攻の枠をこえて集まり、「共同研究」を行う場を設けようというのがその趣旨であり、本学においては、博士課程創設以来、その特徴をなす中心科目のひとつとされてきた。従来は「A」、「B」の二つのグループに分けて行われてきたが、本年は一つに統合され、そのテーマとしては、《第九》（言うまでもなく、ベートーヴェンの交響曲第 9 番のことである）が選ばれた。そのテーマ設定と運営を担当した者として、最初にその経緯についてごく簡単に述べておくことにしたい。

音楽というものを考えてゆくための切り口はいろいろある。物理現象としての側面に着目すれば音響物理学のようなアプローチが可能であるだろうし、人々の織りなす社会との関係を考えようとすれば音楽社会学のようなアプローチが生まれる。その他、音楽が文化としていろいろな局面に関わるその分だけ、たとえ名前はついていなくても、人文系諸学を中心に、音楽を視野に入れた研究はいろいろな形で行われてきており、音楽という共通項を切り口にすれば、あらゆる学問ができるのではないかと思うような広がりがある。

音楽に関わる専門的な技倆をきわめることが目指される音楽大学の場合には、どうしても「音楽そのもの」に注意が集まりがちになる。もちろん、専門的な技倆をきわめるのは音楽という世界に与る専門家としての重要な責務だし、そのためには、一朝一夕にきわめることはできない蓄積が求められるから、ある意味では致し方のないことではあるのだが、音楽をこのような多様な広がりの中に置いてみようとする空気はどうしても稀薄になる。

本学のスタッフとなって間もなく 2 年になるが、それまで私はずっと総合大学の文学部に籍を置き、もっぱらそこからの視点で音楽を見る人生を送ってきたので、音楽大学との空気の違いにはかなりカルチャーショックを受けた。基調報告の中でも触れるが、とりわけ人文学系の諸学では、ここ 30 年くらいの間に、文化をめぐるものの見方に非常に大きな変化があり、音楽に対する考え方も 180 度変わったと言っても過言ではないほどの変化を蒙った。そのような環境に慣れていた私からみると、極端な言い方をすれば、音大の空

気は、30 年以上も前の時代（あるいは 19 世紀？）にタイムスリップしたかのようなものにも感じられたのである。

もとよりこれは良し悪しの問題ではないし、作曲や演奏の最前線で命を張って活躍しようとしている方々に私の価値観やものの見方を押しつけようなどというつもりは毛頭ない。しかし、近年多くの学問領域で展開されている音や音楽についての新しい考え方やものの見方と触れる機会が必ずしも多くない現状がいかにも惜しく、そういう空気を多少なりとも醸成することが、専門的な技倆をみがいてゆく上でも、何らかのみのりをもたらすのではないかという思いを強くもつようになった。

今回、私がこの共同研究のテーマ設定に関わるにあたって《第九》という共通テーマを選んだのは、そのような思いからのことである。《第九》はクラシックの音楽作品としては、おそらく他に例のないくらい、「音楽そのもの」におさまりきらない多様な要素を孕んでおり、さまざまな学問領域からアプローチできる余地が随所にある。私自身がこれまでに関わってきた、文化資源論、メディア論といった立場からの問題を投げかけるだけでも、議論の土壌を広げるための十分なきっかけになりうるのではないかと考え、今年はこの《第九》を題材に共同研究を進めてゆくことにしたという次第である。

そのような意図がどれほど実現されたかとなると、いささか心許ないのだが、兎にも角にもこのような形でひとつの論集をまとめるに至ることができたことを喜ぶことにして、あとの判断はお読みくださった方々に委ねることとしよう。

コロナ禍に見舞われた今年は、いろいろな意味で授業運営上の制約が多い一年だった。一年間の成果を発表する仕方にしても、例年ならレクチャーコンサートなど、いろいろな可能性を想定できるのだが、今年は極めて限られた可能性の中で考えざるを得なかった。授業自体もオンラインで行うことを余儀なくされ、全てテレビ会議用ツールの Zoom を使って行われた。各回の担当者が画面共有機能を用いて行うプレゼンテーションは案外見やすくスムーズで、その意味ではさほど支障のない形で授業を進めることができたように思う。確かにメンバーの横のつながりを作ってゆくことがなかなか難しく、必ずしも自由闊達なディスカッションで盛り上がったとはいえない面もあるのだが、オンラインであるために、通常だと忙しくてなかなかご参加いただけない先生方にも多くご出席いただき、例年に比して多くの教員の方に議論に加わっていただくことができたのは不幸中の幸いであった。個人的には、音楽を専門にしてきたとはいえ、実技の世界とはあまり関わらない形でこれまで暮らしてきた身として、豊富な演奏体験をお持ちの先生方の体験談をお聞きす

はじめに

るだけでも非常に興味深いものがあり、有意義な一年を送れたと思っている。

論集に寄稿して下さったのはそのごく一部の先生方にとどまり、そこで伺ったお話を形に留めておくことができなかったのは残念だが、それによってもたらされた有形無形の遺産がこの論集のあちらこちらに痕跡を残し、それがいつの日か大きな成果として結晶してゆく日がくることを願いたいものである。以下に本年の参加メンバーのリストを掲げておく。一年間にわたる多大なるご協力に感謝を捧げたい。

【教員】 岡田敦子（ピアノ）、星秀樹（コントラバス）、四戸世紀（クラリネット）、秋山隆典（声楽）、星洋二（声楽）、原田敬子（作曲）、渡辺裕（音楽教育学）、下道郁子（音楽教育学）、福田裕美（音楽教育学）、坂崎則子（音楽学）、武石みどり（音楽学）、村田千尋（音楽学）、金城厚（付属民族音楽研究所、オブザーバー）

【学生】 山本澄奈（声楽）、陳金（ヴァイオリン）、久津見れい（声楽）、佐藤由佳子（音楽教育学）、保崎佑（ファゴット）、中川麗子（声楽）